

【目的・方法】江戸時代の化粧は、それをしている人の年齢や社会的立場を具象化しているものといっても過言ではないでしょう。1839年に出版された『安産幸運録』には「奉公しようとしている女で、決まった夫もないのに、眉をおとし、お齒黒をするのは、その容貌を変えて、年齢を高く見せ、給料を多くしようとしているからだ」とあり、化粧による社会的通念を悪用した例として大変に興味深いものといえます。

その化粧に使用された色は黒、赤、白の三色であります。黒は眉とお齒黒そして髪、赤は紅白は白粉と、非常に単純な配色で身分や年齢、未婚であるか既婚であるか、また子供の有る無しまでを表現してしまいました。この三色のなかで、白粉は化粧の根幹となる非常に重要な部分であるといえます。肌を白く美しくみせるために、江戸時代の女性はどのような方法を行ったのか、1828年に京都で刊行された『女教訓身持鏡』によって解きあかしていこうと思います。

【結果】『女教訓身持鏡』はいわゆる女性向けの教養書でその序文から読者は一般庶民であったことがわかります。内容は前半は婦人の徳などの教訓礼法など、後半は手紙の文例といった実に実用的なものであります。その中で特に注目したいのが「婦人諸病妙薬」に関する記述で、七項目からなりその一つが肌の色に関する項目です。「婦人の色を白ふする事 白玉の方 豆腐を日々顔にすり塗べし 色白玉の如くなる」などの他いろいろな方法が述べられています。その記述の多さからみてこの時代における肌が白いことの重要性、化粧における白粉の重要性などをうかがうことができます。